

西南学院とアジア・太平洋戦争

内海 敬三

◇序

私が西南学院中等部（修業年限5年制）に入学した1944（昭和19）年は太平洋戦争も末期で、間もなく上級生は学徒動員の「通年実施」で工場に動員され、学校は我々一年生だけとなった。しかし残された我々もやがて勤労奉仕や農家作業で満足な授業は出来なくなっていた。

以下の文で中等部に関するものは主として私自身の体験で、高等部（専門学校）に関するものはグリークラブ40周年誌や先輩諸氏の体験を直接、間接に聞き、記したものである。

1. 日中戦争

伊藤武雄¹は西南学院中学部在学中グリークラブで歌っていたところ、顧問で宣教師のミス・フルジュムに声楽家としての資質を認められ、1927（昭和2）年高等学部卒業後、声楽家を志し東京音楽学校（現在の東京芸術大学）に進んだ。後に同校の助教教授となったが1937（昭和12）年、日中戦争（支那事変）で召集を受け中国の大場鎮²の戦場で「右手首爆創」内地送還となる。

◇廃兵意識

ピアノの難曲も弾きこなしたという伊藤は、野営地近くの音楽学校でピアノを弾く機会があった。しかし自分は「応召した以上兵士であり、音楽家ではない」とピアノに触れなかったという。自ら音楽家であることを断念し兵士となること、それは人間としての“情”を否定し、人を殺し、殺されることに外ならない。その重い決断にも拘らず、右手切断によりその兵士であることすら否定したのである。その後、野戦病院を訪れた新聞記者に伊藤は「手を切り落とした日にはさっぱりしたと思いましたが、日がたつにつれて廃兵意識が強くなりもうピアノは弾けません。」と語ったという。この「廃兵意識」の四文字はあまりにも哀しい。

1 第9代理事長・第10代院長伊藤俊男の実弟

2 日華事変の上海周辺の大規模な塹壕線で司令官も戦死するという激戦地であった。

◇桐朋学園設立

伊藤は帰国後も声楽家‘バリトン伍長’として活躍。戦後、斉藤秀雄、井口基成と共に桐朋学園音楽部の設立に中心的な働きをした。さらに1955（昭和30）年には山田耕筰の要請を受け斉藤秀雄、鷺見三郎、團伊玖磨等と共に大阪の「相愛学園子供の音楽教室」設立にも参画したのである。また邦訳歌詞の研究でも1941（昭和16）年に毎日音楽賞を授賞、51年に勲四等旭日小綬章を授賞した。1987（昭和62）年12月2日逝去、享年82歳。桐朋音楽大学にはその業績を讃える伊藤の胸像がある。

II. 太平洋戦争

◇キリスト教撲滅演説会

1939（昭和14）年第二次世界大戦が始まり、南進論の台頭とともに、翌年我が国は日独伊三国同盟を締結。これにより日米関係は悪化の一途をたどった。国内では教育界、宗教界も完全に軍の統制下に置かれた。さらに宗教団体法が施行されてからはキリスト教に対する弾圧も露骨になり、米国人は敵性人とみなされた。宣教師も外出の度に目的を特高³や憲兵に聞かれるなど伝道もままならぬ状況となり、次々に帰国していった。

その後日本人牧師にも特高が目をつけ、“キリストは平和主義だが、この戦争を止めろということか。”と言いがかりをつけたり、また教会の礼拝中に右翼の青年がわざと足音をたてて最前列に進み、腕組みをして説教者を睨み付けるといういやがらせもあった。また1940（昭和15）年には西南神学院さえも廃止となった。そしてついに最右翼といわれた興亜青年連盟が鹿児島でカトリックの学校を閉鎖させた勢いで、同年9月24日、福岡市西中洲の県公会堂（現記念館）において「キリスト教撲滅演説会」を開催することとなった。当時の九州日報には聴衆は約350名で「聴衆の約半分は基督教関係者なりし為、開会前より之等聴衆と司会者間に異常の対立的雰囲気醸成しつつあり…」と記されている。

弁士はキリスト教の反国体性、反国家性、あるいは中国における外国人宣教師の皇軍（日本軍）への妨害行為に対し激しく攻撃した。さらに“日本人でありながら、なぜ外国の神を拜むのか。日本人は天照大神を祀り拜めばよい。クリスチャンは売国奴である”などと喧伝した。九大生高木俊一郎⁴と信者と思われる婦人が立ち上がって“違います！”と叫んでさらに言葉を続けようとする“バカやろう！、お前はアメ

3 特別高等警察：思想を取り締まる警察の一部門

4 九大医学部学生、中部教会信徒、後に大阪教育大学教授、西南女学院大学初代学長。

リカ人か、スパイか”などと罵声を浴びせながら主催者側の青年達が詰め寄り「会場は騒然たる状況を呈するに到れるを以て取締警察官に於て兩名を検束せり。」(『日本キリスト教団福岡中部教会100年史』)。

翌25日付九州日報の朝刊は「キリスト教撲滅大会で聴衆から不穏言動 大野牧師取調べらる」との見出しで次ぎのように報道した。「この紳士は日本キリスト教会牧師大野貫一郎氏である事が判明同署では英人スパイ検挙を契機として捲き起っている打倒英国が力強く叫ばれている折柄事件を極秘にふすと共に引続き取調べ中であるが事件は意外の方面に飛火する模様で成行きは頗る重視されている。」

大野牧師は遅れて会場に到着したが、聴衆は半分にも満たず、教会関係者の他に西南の柔道部をはじめとして運動部の多数の猛者たちも学院の存立にかかわる重大事として会場様子を見守っていた。「演説会の終りにキリスト教主義の福岡女学院や西南学院を閉鎖させる、国体にそぐわないキリスト教の撲滅に邁進する等の何箇条かの決議が提唱された後“キリスト教撲滅を期して天皇陛下万歳三唱を”との発声に大野牧師は決然と立ち上がり“キリスト教撲滅には賛成できない!”と言うと西南の学生達も一斉に賛同し会場は騒然となり、それを制しようとする関係者と乱闘になり、待機していた警官は学生達を拘束、トラックにつぎつぎと乗せ警察に連行した。」(『福岡地方における民主主義の基盤と発展』⁵より)

しかし、新聞が報ずるように350人もの聴衆の前で起こったこの事件を‘極秘にふす’などとはナンセンスであり、さらに戦後大野牧師は福岡県知事の要請を受け、県の公安委員長となり、今度は立場が変わり民主化のために警察を指導することになったのは皮肉である。

翌朝西南学院の超満員のチャペルで波多野培根先生は「国体と基督教」と題して、「天皇陛下万歳を濫用すべからざること。即ち仏教撲滅、基督教撲滅、近衛内閣打倒などの意味において天皇陛下万歳のごときこれなり。」と話された。さらに「国体は一部人士の専有物にあらず」と説かれ、最後に「この日本の大事な時、又西南にとっても大事な時にあの演説会でとった君達の行動は立派であった」と評された。

キリスト教撲滅運動は西南人をして、かえって西南の存在の意義と使命とを新たに自覚させる契機となった。しかしその翌年、1941(昭和16)年12月8日遂に太平洋戦争が始まり、その後学院は一層困難な時代を迎えるのである。

5 民主教育協会の援助による村上寅次、坂本重武のほかメンバー6名の共同調査研究第四集で、1960年1月29日に杉本勝次に聞き取り調査を行ったもの。

◇（高等部）グリークラブ廃部の危機

中学以上の学校に陸軍が派遣した将校を「配属将校」といい、授業の中に配属将校が担当する軍事教練⁶が組み込まれており、その権限は校長と同じと言われていて配属将校はサーベルをじゃらつかせて校内を歩いていた。

1942（昭和17）年ごろには学校における軍事教練も一段と厳しくなり、配属将校の某大佐は「音楽なぞ軟弱であり男子たるものとする事ではない」という考えから、グリークラブに対する批判を強めていた。そして教授会の大勢も「合唱部解散も止むなし」との判断に傾いていた。その時グリークラブの部長であった笹森四郎教授は、部員の半数が航空部であることから「航空要員になるには聴力を鍛えることが必須であるから合唱部は必要」と力説され、グリークラブは辛うじて廃部を免れたのである。



▲校庭で行われていた軍事教練（井上良助〔1943高等部卒〕夫人提供）

◇校長自ら体罰を受ける

1943（昭和18）年6月、アメリカ軍に撃墜された山本五十六元帥の国葬が行われた。連合艦隊司令長官が戦死するのは殆ど例がなく、戦況の厳しさを示す出来事であった。

国葬の日、中等部の全生徒がグラウンドに集められた。ところが一部の生徒が集合に遅れたため業を煮やした配属将校が「全体責任」と称して生徒全員をグラウンドに座らせた⁷。伊藤俊男中等部長（校長）も、自ら朝礼台の上でゲートルを巻いたまま座られた。驚いた配属将校は先生に立つように促したが「生徒が悪いのは私の責任で

6 兵隊になるための初歩的訓練

7 すねにゲートルを巻いたままで正座すると、足が痺れて立てなくなるほどで当時体罰としてよく行われた。

あるから私も罰を受けます。」と言って座り続けられたという。この出来事は当時の生徒の間で今でも語り継がれている。〈桐明正談：1949年高等学校卒〉

◇時局もわきまえず大騒ぎ

当時は国民皆兵として20歳以上の男子は兵役の義務があり、高等学部（旧制）を卒業すれば軍隊に入ることが決まっていた。グリークラブの部員も卒業して多くは兵役に就いていた。1942（昭和17）年7月、第8回の定期演奏会の収益金で長崎へ演奏旅行を計画した。同年4月東京初空襲、6月にミッドウェイ海戦という頃である。許可を得るため警察に申請にいったところ、「この時局に学生の方際で有料の演奏旅行を開くなど言語道断」と叱責された。ならばと、当時福岡で最も有名な千代町の料亭「常盤館」で送別会をすることになった。座敷の窓には空襲を警戒して明かりが漏れないよう暗幕がしてあった。

夕方から始まった会合は次第に盛り上がり、文字通り飲めや歌えの大騒ぎとなった。料亭の方も入隊する若者の思いを知っていてか大目に見ていた。そのうち他の客もいなくなったが、閉店の時間もあらばこそ、貸切りの状態で相変わらず騒いでいた。帰りに料亭を出るとき女将が「あなたたちほど大騒ぎした人はいない。あの頭山満さんや中野正剛⁸さんたちよりも騒いだね。」とあきれ顔であった。

灯火管制下、帰途につく夜の街の暗さは彼等の未来を暗示するかのようで、さすがに万感胸にせまり涙を浮かべる者もいたという。〈内海洋一談：1942年高等学部卒、第8回定期演奏会指揮者〉

◇（高等部）グリークラブ最後の演奏会

日中戦争の拡大とともに1939（昭和14）年、学院関係者の戦死者は10数名となり、第1回の追悼記念式が赤れんかのチャペルで行われた。そして1943（昭和18）年の第4回記念式には慰霊者は33名にもなっていた。同年有名な神宮外苑学徒出陣壮行会の年である。グリークラブの部員も9月の入隊が決まり、卒業式は8月に繰り上げられ、その結果演奏会は暑い盛りの7月に行われた。

戦争末期で福岡の空襲も予想されるという時で、当日のプログラムには「警報発令の際は新聞に記載す⁹」とある。にもかかわらず当日の写真には「満席の聴衆」が写っている。実は東京では『1941（昭和16）年12月8日の（開戦の）前夜までアメリカ映

8 頭山満とともに福岡出身の愛国主義的政治家。

9 警戒警報により延期となった場合、演奏会を再開実施する日時、場所を新聞に掲載するという断り書がプログラムに記載されていた。

画「スマス都へ行く」「ベンガルの嵐」等が上映されており、それらが興行として心配げもなく相当の入りを見せていた』（『この國に戦争があった‘淀川長治’一枚の号外』PHP）のであった。



▲グリークラブ最後の演奏会（1943年7月10日：今村正仁〔1943年高等学部卒〕提供）

また「1945（昭和20）年、福岡の空襲時に女剣劇、大江美智子の福岡興行では客の入りは7割方と人気があった」（『火の雨が降った 6・19福岡大空襲』）という。

このように開戦時や敗戦間近の緊迫した時局でさえ、一般市民は他人事のように娯楽を楽しむということはあったのだが、いくら戦争末期で情報統制あったとしても戦況の厳しさはある程度は知らされていたし、歌う部員も聴く会衆もこれが最後の演奏会となるであろうという思いで‘満席’となったと推測される。1943（昭和18）年の学院新聞は演奏会の様子を以下のように記している。「西日本新聞社後援による学院音楽部第9回演奏会は7月10日学院講堂に於いて開催された。音楽部長笹森教授の開会の辞に次いで国民儀礼¹⁰あり。前線の勇士を偲んで『海ゆかば¹¹』を斉唱、プログ

10 「東方遙拜」（東京の皇居の天皇に向かって最敬礼をすること）と「君が代」の斉唱

11 “海ゆかば 水づく屍 山ゆかば 草むす屍 大君の辺にこそ死なめ 顧みはせじ” この大伴家持が詠んだ詩に信時潔が作曲した荘重な国民歌謡で戦争末期には戦死を告げる大本営発表の際この曲が流されていたので悲愴感溢れる曲としての印象が強い。

ラムに入る。(中略) …愈々今演奏会の華、声楽部全員によるグノーの歌劇『ファウスト』よりの抜粋『兵士の合唱』の力強い旋律は一同を興奮に巻き込み暫し拍手鳴り止まず、追加された曲目チェコスロバキア軍歌『戦線へ (ウ・ボイ)』には又も絶讃の拍手が送られ漸くにして十時近く非常なる盛況裡に幕を閉じた。』『演奏会が済むと、誰いうとなく日頃練習していたピアノの周りに集まり、あれこれと歌い出し、最後に歌った『兵士の合唱』には『永き戦い今やここに収まりて、懐かしき我が故郷に帰りきぬ』という歌詞があり“我々も又会ってこの歌をうたえたらなあ”と涙を流しながら互いに手を取り合い、その場は悲愴な空気に充たされた。』と、その時の指揮者井上良助は述懐している。(西南学院グリークラブ創立四十周年記念誌『四十年の歩み』より)

最後に、彼らはいつものように赤れんがの講堂から「いくさびと」¹²や「戦場へ (ウ・ボイ)」を歌いながら西新にくり出した。特に兵役に就く者は感慨深いものがあつたであろう、さらに天神までも合唱しながら歩いて行ったのである。(今村正仁談：1943年高等学部卒、第13期海軍飛行予備学生)

◇陶器の校章

戦況がますます不利になるにつれ、敵国の宗教であるとしてキリスト教に対する批判が更に厳しくなってきた。中には「キリスト教学校の東洋英和の“英”は英国の英だ。大名のカトリック教会のステンド・グラスが天皇家の菊の御紋に似ているのはけしからん」というような愚にもつかないものもあつた。

西南学院の校章である組文字のSWAも (South-western Academy を表す) 敵性語であるとして「三葉の松葉」に変わっていた。また金属類の不足は既に1941 (昭和16) 年に始まり「金属類回収令」が出され、お寺の鐘や家庭の鍋や釜などが政府の求めに応じて回収された。門の扉やトロフィーまで供出され、校庭には回収された金属が山のように積まれていた。鋳物製の校章も簡単には手に入らなくなり、やがてそれも不細工な陶器に変わってしまった。



「三葉の松葉」の陶器の校章

12 「いざ立て、いくさびとよ み旗につづけ」で始る米国の福音讃美歌で、本学院の藤井泰一郎教授によって邦訳され、そのリズムカルで活気あふれるこの曲は「いくさびと」という題名と相まって戦争中好んで歌われた。戦後も全国の男声合唱団によって事あるごとに歌われている。

◇少年兵の勧誘「ノルマ」

当時、県の教育行政は内務省の管轄で、県が役場と学校長宛に若者が率先して志願するように指導し、志願兵募集には県から各市町村にノルマが割り当てられていた。

西南学院中学部では3年生以上各学級全員に申込書が配布され応募するように勧められた。「応募しないと西南がつぶされる」という噂もあり、純粋な中学生はしばしば親にも相談せずに少年兵に応募した¹³。結局各学級6～7名が応募したため、1学年4学級あったものが3学級編成に縮小されたのである。応募者で第2次の入隊試験に合格した者は、博多駅で特別仕立の列車で鳴りもの入りの見送りを受けて出征し、その多くが特攻隊として空に海に若い命を散らしたのである。

◇(中等部) 海洋訓練

学校の教練は通常陸軍の訓練であったが、海軍の教練は海洋訓練と称し宮地嶽神社¹⁴の社務所に一週間宿泊して行われた。海軍の下士官による厳しい訓練で彼は「海軍精神魂入棒」と称するこん棒を持っていて、開口一番“お前等の1人位殺しても腕の善行章が一つ無くなるぐらいだ、覚悟せよ。”と言って我々を脅しつけた。そして手旗信号¹⁵が読めないというのは叩き、モールズ信号の覚えが悪いというのは叩いていた。ある時は駆け足ではるばる東郷まで行き、カッター（大型のボート）の練習をした。ここでも漕ぎ方が遅いと言っては叩かれた。それはまるで教育は叩く事にあるとでもいうようであった。

最後に「權たて！」の号令で重くて太いオールを水から出し、冷たい水が袖から入ってくるのを我慢しながら必死になって立ててようやく練習は終わった。また、楽しめるべき食事も太い竹を切っただけの器に御飯とダイコンの切れ端が申し訳程度に入っている味噌汁もどきの塩汁で、食べ盛りの我々にとって質量ともに満足できる食事ではなかった。こうして海洋訓練で植え付けられたのは海軍精神どころか恐怖心ばかりだったので、我々は宮地嶽神社を「宮じごく」と言っていた。

◇中学生が電車を運転

戦争が激しさを増し、資材はもちろん相次ぐ召集により乗務員も不足し、それを補うため13歳、14歳の中学生は男子だけでなく女子までが大牟田線を運転していた。1945年ごろ、運転を任されていた中学部2年生の丸毛敏夫¹⁶は筑紫駅付近を走行中、

13 第13期海軍甲種飛行予科練習生として出征した浦了と渡辺惣（どちらも1946年中学部卒）の談による。

14 現在の福津市

15 紅白の小旗をもって離れた船同士で交信する方法

16 1950年高等学校卒。南筑中より転校。

グラマン戦闘機の機銃掃射を受けた。あわてて車輻の下にもぐり込むと、そこは人で一杯だったが、辛うじて車輪の横に潜り込み難を逃れた。また銃弾で顔にかすり傷を受け気を失った女学生もいた。この戦闘機の攻撃による犠牲者は死者64名、負傷者100名と言われる。飛行機が去った後、逃げ帰りたい思いに堪え、腹部を撃ち抜かれ内臓が飛び出した負傷者を戸板に乗せて運んだり、血でよこれた車輻の掃除をしたという。

◇ (中等部) 農家作業

1944 (昭和19) 年1月、動員を一層強化するため、政府は「決戦非常時措置要綱に基づく学徒動員実施要綱」を制定した。さらに徴兵と軍需産業への勤労働員の強化は農業従事者の減少となり、農業生産に深刻な打撃を与えた。文部省は食糧の国内自給の要請に応ずるため、国民学校初等科4年生以上の児童青年学校および中等学校生の学徒動員を閣議決定した¹⁷。

この要請に基づく西南の勤労働員は糸島の長糸村で行われ、10日間泊まりがけの農家作業は稲刈りであった。一軒に二人ずつ配属された農家の入り口には「出征兵士の家」という札がかけてあり、老人と娘さんの二人が住んでいた。稲刈りという慣れない作業のため、鎌で手を切るやら腰は痛くなるやら大変であった。あの頃の農夫はこんな労働を毎日続けていたのであろう。

◇ (中等部) 勤労働員

1944 (昭和19) 年の勤労働奉仕は席田 (今の板付空港) の陸軍の飛行場作りであった。朝は早くから起きて博多駅まで電車、あとは徒歩であった。飛行場には米軍の捕虜がいて我々と同じように土や石を運ぶ作業をしていた。好奇心の強い連中が捕虜と片言の英語で話したり、中には砂糖をまぶした大豆を与えたりした者もいたという。

その時指示によって2、30センチ位までのびた麦を抜いていたところ、軍が接収した畑の持ち主と思われる男性が来て“一寸待って下さい”と我々を制し、まだ青い麦を黙々と刈り取っていた。麦はその人が植えたものであろうが、近寄り難いその人の無言の行為はやり場のない農夫の無念さを表しているようであった。

◇ 白紙召集、女学生の工場労働

軍需工業の労働力を確保するために、1939 (昭和14) 年に公布された国民徴用令に

17 参照：「東京新聞」、『新聞集成昭和史の証言』

より、強制的に職場を転換させることができた。これら徴用者には白い命令書が渡されたので軍隊の「赤紙」（赤い色の召集令状）に対して「白紙（しろがみ）召集」と呼ばれた。さらに「一般男子ノ勤勞給源ハ相当逼迫セル狀況ニアリ」¹⁸「此ノ際女子ノ勤勞二期スル所極メテ大ナルモノガアル」として「団体的ニ長期出勤ヲナサシムルノ制度」を設け女子の徴用が実施された。



▲狭窄射撃場学院構内に完成 1934(昭和9)年10月31日

◇福岡空襲

日本の主だった都市がつぎつぎに空襲を受けている内に、福岡でも無気味なサイレンの音とともに警戒警報が頻発されるようになった。その度に授業は中断されていたが、やがてそれも一層頻繁になり、空襲警報になってはじめて下校が許されるようになった。帰る途中にグラマンの機銃掃射を受け、近くの防空壕に入り難を逃れたこともあった。

そして遂に1945(昭和20)年6月19日夜11時過ぎ、無気味なサイレンが響き空襲警報が発令された。まもなくサーチライトが幾筋も空を照らし出すと、地を這うような爆音と共にB29爆撃機が次々に浮かび上がった。煥発を入れず曳光弾が機影を追うように次々と撃ち出された。しかしB29は射程距離を計るようにその上をゆっくりと飛んでいた。ザーッという音をたてて焼夷弾が落ち、あちこちに火の手があがるのを見て足はガタガタ震えた。火災は次第に我が家が迫り、遂に隣家の蚊屋がめくれるよう

18 参照：『労働行政史』

に燃え、火が畳を這って燃え広がるのが見えた。火は一層燃え盛り、我が家の壁が焦げはじめたので一斉に壁にバケツの水をかけ、類焼を防ぐのが精一杯であった。熱さで顔が火照り、服が熱くなる度にバケツの水を頭からかぶると湯気がワーッと立ちのぼった。やがて水道の水も出なくなり裏の井戸から汲みあげた。隣家が燃え尽きて倒れかかろうとしたので家族4人で太い棒で押し返し辛うじて事なきをえた。そのうちサーチライトも曳光弾も消え、B29は機体を真っ赤に染めながら威圧するかのよう悠々と低空を飛んでいた。一夜明けてみると、赤坂門の通りから国体通りの角の我が家まで一軒を残してすべて焼け落ちてしまっていた。終戦のわずか2カ月前のことである。その夜福岡の街の60%が灰燼に帰し、死者は2千人を超え、級友も何人も亡くなった。終戦の決断がもう少し早ければと思う。

空襲の翌日、学校に行ったが誰も見あたらず、ひっそりとしていて、ただ赤れんがの講堂（今のドージャー記念館）の前には銀色に光るテープが地面にたくさん落ちていた。あちこちの木の枝にかかったテープは静かにゆれていた。米軍の飛行機が電波妨害のために撒いた錫箔であった。この60機のB29による爆撃は軍事施設も民間の家も区別しない無差別爆撃で国際法違反であるという。私はイラク戦争における戦闘の映像が映されると、今でも曳光弾が光ったあの日の亡くなった友人を思い出す。

◇大濠公園が焼ける

「空襲の翌日大濠公園には見渡す限り焼夷弾の残骸が、あたかも土筆^{つくし}が生えたように地上に林立して、あの広場がまったく車の通れる余地がないほどであった。」（『福岡大空襲』西日本新聞社編）「数日後、付近の遺体は運ぶものがないので焼けたタンで運んで茶毘に付していたが、その遺体は皆普通の形ではなく、苦しみもたえ身をよじらせた形のまま硬直していた。」（『火の雨が降った6・19福岡大空襲』）焼夷弾の波に追われて大濠公園に飛び込んで焼夷弾の油脂が池の上で一面に燃えていて息ができなくなり、多くの人たちが溺死したのである。友人たちは学校の帰りに、それらの人たちの遺体が衣類の端切れから身元が分かるかも知れないというので保険局の前や横に何体も並べてあるのを見たという。（西川崎戸・友納素人：1940年高等学部卒）

今、大濠公園では母親の見守る中で子どもたちが嬉々として遊んでいるが、60年前に同じ場所で繰り上げられた地獄絵は想像できない。

◇終戦：クラブ活動復活

1945（昭和45）年8月15日玉音（天皇の録音）放送とともに戦争は終わった。戦後の教育改革により軍国主義一色であった学校も、新制高校ではクラブ活動が一斉に花開

いた。文化部では新聞部、弁論部、文芸部。運動部ではバスケット、ラグビー、ハンドボール等の活動が始まった。また生徒会の会長を選ぶのに候補を立て、カンカンガクガクの議論をするなど言論の自由、民主主義の復活なるものの体験は新鮮であった。

専門学校では出征していた部員も終戦とともに復帰しグリークラブは再開され、さらに部員募集をしてメンバーも16人となり、指揮者に石丸寛氏を迎えた。やがて戦争の空白を埋めるかのように合唱活動も急速に盛んになり、グリークラブは西部合唱連盟のコンクールにおいてロシア民謡「カチューシャ¹⁹」を歌って優勝し、見事復活を果たしたのである。

追記：本稿作成に当たり、桐朋音楽大学、グリークラブOB、旧友、その他関係者の皆さまより、多大なご協力をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

19 第2次大戦中にイサコフスキーの詩にブランテルが作曲したソビエト歌謡であるが、一般にロシア民謡とされている。